

[書評]

エヴァ・ホフマン著、小原雅俊訳
『シュテットル：ポーランド・ユダヤ人の世界』
(みすず書房、2019年、368頁)

宮崎 悠

本書は Eva Hoffman, *Shtetl. The Life and Death of a Small Town and the World of Polish Jews*. Secker & Warburg, London, 1998 を訳出したものである（ポーランド語版は2001年に刊行）。シュテットル *shtetl* はイディッシュ語の *shtot*（町、都市）の指小語であり、「小さな町」を意味する。第二次大戦後、すでにその場所が失われてしまった後においては、「シュテットル」は東欧のイディッシュ語文化圏におけるユダヤ人の暮らしを、シャガールの絵のような温かさや不思議な雰囲気を伴って想像させる言葉となった。また同時に、シュテットルは、ユダヤ人住民だけではなく、隣接して暮らす「ポーランド人の農民」との間で「親密さを保って」暮らしていた場所でもあった¹。

著者エヴァ・ホフマンは、1945年7月、ポーランドのクラクフのユダヤ人家庭に生まれた。両親はホロコーストの生存者であるが、弟妹を含め親族のほとんどを戦争中に失っていた。ホフマンの自伝的著作 *Lost in Translation. A Life in a New Language*（『アメリカに生きる私——2つの言語、2つの文化の間で』木村博江訳、新宿書房、1992年）や *After Such Knowledge: A Meditation on the Aftermath of the Holocaust*（『記憶を和解のために——第二世代に託されたホロコーストの遺産』早川敦子訳、みすず書房、2011年）には、家族の来歴や、故郷の喪失に伴う思索の経緯が綴られている。

1959年4月、13歳の時に、ホフマンはバルト海沿岸の港町グディニアから「他国」へ向かう船上にいた。戦後のポーランド国家は共産主義圏の一員となったが、ポーランド社会はソ連（ロシア）による支配との潜在的な緊張関係にあり、その対抗意識は例えば学校教育における「宗教」科目の導入の際に顕在化した。多くのポーランド人にとり、「宗教」の導入は反ソビエトの勝利として喜びをもって迎えるものであったが、ユダヤ系ポーランド人は「反ユダヤ主義の公示」と受け止め、動揺のもととなった²。親しく付き合っていた一家のイスラエル移住にも促されて、著者の両親はイスラエルかカナダへの移住を迷い、逡巡した末にカナダへ渡ることになったのである。ホフマンは妹と両親と共に見送りを受けていたとき、「喪失の予兆」がどのようなものであるかを身をもって知った。

「崖の上で楽隊がポーランド国家の陽気なマズルカのリズムを奏でると、私は哀

しみに幼い体を刺し貫かれ、それがあまりに強烈だったため、急に泣くのをやめてじっと痛みをこらえた。…この動揺の瞬間に私を襲ったのは、まったく未知な感情領域からの閃きだった。それは喪失というものがどれほど人を傷つけるかということ私に思い知らせた」³。

ホフマンは故郷であるポーランドからまず自らが去り、移住先である北米の英語社会において新しい自我と言語表現の確立を強いられる中で、意識的にポーランドに残った人達との接触を断った。1968年にはゴムウカ政権が大規模な「反シオニズム」のキャンペーンを展開し、ユダヤ系の出自を持つ知識人の多くがポーランドを出ることを余儀なくされた。ホロコーストを生き延び、戦後の再建に働いた人々が、事実上国を追われる事態になったのである。著者がポーランドに残してきたもの、人との関係もまた、それらが消えたり別の場所へ去ったりすることにより失われた。ポーランドを去る時に感じた「喪失の予兆」が与えた深い傷や、別離が与える苦痛をこなしながら、著者は半生を構築し文筆家として身を立てるようになった。

ホフマンが向かい合わなければならなかった、二つの言語圏を移動する際に生じた別離と喪失は、両親の戦争中の体験を理解し受け入れる際の土台となった。著者の両親はホロコーストの生存者であり、幾度も危機的な状況に陥りながら、そのたびに直感と判断の正確さによって、また偶然に出会った人々の援助によって死を逃れた。母方の家族は全員ホロコーストで死んでおり、母はなかでもまだ若かった妹（著者の伯母にあたる）の運命について、最も大きな痛みを抱えていた。また、父の弟は隠れ家にいるところを密告によって発見され、その際父は同じ部屋の壁の中に隠れていて助かった。父はそのことを長い間話さずにいた。

こうした両親の経験は、直接には語られなくとも子供である著者を心配させ、どんなに親子の意見が対立しているときであっても決して触れてはならない部分として守られた。家庭内の雰囲気について「私と似たような経験のもとで育った者の多くが、家族の中でホロコーストが話題にのぼると、苦痛のあまり言葉がばらばらになって脈絡のない話になっていったことを覚えている。その物語は、みな同じように、おのずと口をついて出てくるおまじないのように繰り返し語られた。さまざまなものが入り混じってそこに包み込まれ、鋭さを保ったまま記憶されていた。咀嚼されずに凝縮された記憶が、そのまま私たちに手渡されたのだと思う。」⁴と述べている。

そうした特殊な育ち方をした「第二世代」つまりホロコースト生存者を親に持つ一人として、著者は、

「私たちが過去に起きたことを認識し、その知識を与えられているということは、巨大な悲劇に直面することを余儀なくされ、亡くなっていった人たちの存在に

負っているということなのです。そして、過去の悲劇がその後の人間たちに与えた影響を理解することは、おそらく私たち自身が引き受けるべき仕事なのです。」⁵

と自らの役割を規定する。そして、「集団的な大破局がもたらしたものの意味を考え」、「その大破局の記憶が、個人のそして集団的な人間の次元でどのように変わってきたか」という問いに向かう⁶。

『シュテットル』は、著者の両親がかつて暮らしていた場所に近いブランスクという小さな町の歴史を手掛かりに、ユダヤ人住民とポーランド人住民との関係を問い直す試みである。著者は戦後生まれであり、戦争中の出来事について直接それを目撃しなかったが、「第二世代」としての責任を感じている。登場する人々が語る出来事の只中にはいなかったものの、それらが投げかける「ホロコーストの長い影」の中にいることを自覚しているからだ。

かつてユダヤ人が暮らしていたブランスクを著者は訪れ、案内役を通じて証言を集めて、今はない場所の歴史を描き出そうとする。カナダへの移民体験から二つの言語、二つの文化の間で困難な模索を続けてきた著者にとって、シュテットルが生み出された歴史的な文脈について知ることは、家族の出自と結びついた世界を解き明かすことでもあった。

本書の主な記述はポーランド・ユダヤ人の歴史を概説的な部分を含めて説明することに充てられており、その意味では先行するフェリクス・ティフ『ポーランドのユダヤ人：歴史・文化・ホロコースト』（阪東宏訳、みすず書房、2006年）や、ハイコ・ハウマン『東方ユダヤ人の歴史』（平田達治ほか訳、1999年）によって、なじみ深い内容である。しかし、これまでの思索や問いかけを前提にして著者が明示するのは、ポーランドという場所の特殊さと、ホロコーストをめぐる歴史観の対立が膠着に至った背景である。

ホロコーストにおけるポーランドの特別な位置という問題は、戦前のユダヤ人住民の人口がヨーロッパで最も多く集中していたことに起因している。絶滅政策の対象となる人々の大多数が暮らしていたために、ポーランドにはナチスの強制収容所の大部分が建設され、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅の場所となった。戦前には300万人いたユダヤ人が、戦後まで残ったのは24万人から30万人であった。こうした経緯から「ナチスは根絶計画を立てるに際してポーランド人の共謀を期待していた」といった言説が繰り返し現れた。そのたびに説得的に論駁されてきたが、ポーランド人と民族虐殺とを結び付ける言説は、ポーランド側の防御的姿勢を頑なにさせた⁷。

また、戦後のポーランドの状況は、ホロコーストの生存者の「怒りと苦痛を強める」ものであった。戦争直後には帰還したユダヤ人に対し、ポーランド人住民との間で

暴力や殺人が起きた。共産主義政権下において政治的に議論を呼びそうな問題は抑えつけられ、ホロコーストの独特の歴史や戦前のポーランド・ユダヤ人の豊かな文化とといったことは触れることの出来ないテーマとなっていた。数十年間の沈黙の後で、1989年の体制転換は、公の場で抑圧されたテーマが取り上げられるようになり、反ユダヤ主義に関する論争が、急に抑制を失ったかたちで、また当事者のいずれの側も抱いていた欲求不満の反動に力を得て、開始されたのだった。

この間に、「西ヨーロッパ」がポーランドに投影するイメージもまた変化していた。西側では、第二次大戦中にポーランドが何を経験したかという知識は「単純化され」、共産主義のプロパガンダによって歪曲されている前提で受け止められた。冷戦の間にポーランドのイメージは暗く冷たいものに固定されてしまい、それとは対照的に、西ドイツは新たな民主主義と経済発展のおかげで、存在感を示すようになった。その結果、「ドイツの反ユダヤ主義について、あたかもそれが国民性であるかのように語ること」や、ドイツ民族とナチズムとを混同することがますます流行遅れになっていく一方、「ポーランド人の反ユダヤ主義については、あたかもその姿勢がポーランド人の性格の本質的で変わることはない特徴であるかのように語る事ができた」⁸のだと著者は指摘する。

ポーランド人に「生まれつきの反ユダヤ主義」がある、といった言説は、著者の両親の経験だけみても、現実起きたことの複雑さからすれば、「逆歪曲」というべきものである。また、「どの物語の意味も結末次第」であるが、物語は歴史とすっかり同じではなく、個々の美談によって「全事実」を救うことはできない⁹。

ブランスクにおける調査の後、著者はポーランド人とユダヤ人の関係について「多文化の実験が完全に『正し』かったり、全面的に成功であったりしたことはめったにないが、それが完全に失敗したと判断することはできない」のだと指摘する。そして、「差異に対する敬意と共通の帰属意識を結合させるための満足のいくような枠組みを見出すことができなかった」とし、「ポーランド人もユダヤ人も互いを、自分の利益を守るために論陣を張る敵対者としてではなく、ひとつの社会組織のメンバーとみなすことができるような共通領域を見出すことはなかったし、理論づけることさえしなかった」と述べる。

原著が刊行されたのは1998年であり、「もし多文化社会の中でともに暮らそうとするなら、私たちは差異を守り育てることに加えて、世界の共有という感覚を持たなければならない。これは私的領域において強力な文化的、精神的、そして民族的アイデンティティを保ち続ける可能性を、それどころかそれを育む可能性を排除しないし、そのようなアイデンティティを崩壊させ、普遍的な『人間の本性』に帰着させることを示唆もしない。」¹⁰という本書の提言には、1990年代にヨーロッパが抱いていた(あるいはそこに投影され期待されていた)展望の多幸感を思い起こさせる。

その後の20年間に、反ユダヤ主義をめぐる議論においていずれの側も主張を硬化させ、極端化させる状態が見慣れたものとなった。幾つもの「公的な場」ができ、何の制約もない発言さえ可能になった。いま「世界は共有」されているが、それは細分化されたたくさんの世界の共有であり、共有の範囲は限定されている。「多文化社会がばらばらの、防備を固めた孤立した小集団の集合ではなく、社会であり続けようとするなら、「個別的な利益のために発言できるだけでなく、社会の成員として公益の視点からも発言できる公的な場が必要」¹¹である、という著者の指摘は、20年間の試みの後であるためになおさら、その困難さを伝えている。

注

- 1 エヴァ・ホフマン『シュテットル——ポーランド・ユダヤ人の世界』小原雅俊訳、みすず書房、2019年、15頁。
- 2 エヴァ・ホフマン『アメリカに生きる私——2つの言語、2つの文化の間で』木村博江訳、新宿書房、1992年、47頁。
- 3 同上、6-7頁。
- 4 エヴァ・ホフマン『記憶を和解のために——第二世代に託されたホロコーストの遺産』早川敦子訳、みすず書房、2011年、18頁。
- 5 同上、iii頁。
- 6 同上、i頁。
- 7 ホフマン『シュテットル』3頁。
- 8 同上、5-6頁。
- 9 同上、9頁。
- 10 同上、317-318頁。
- 11 同上、317-318頁。